

青森県は八甲田連峰を境にして南部地域と津軽地域に分かれるが、津軽地域は岩木山の見えるところといつても過言ではないだろう。岩木山は津軽の人びとに多くの恵みをもたらしてきた

が、今回は明治以降における、岩木山ろく開発の変遷を辿ってみよう。明治維新により、徳川政権が崩壊し、近代国家が誕生すると、新政府のリーダーは欧米列強のような国づ

くりを、「富国強兵」「殖産興業」のスローガンをもとにめざしていく。青森県における殖産興業は、主に農牧場経営という形で実施されていくが、その近代的な大規模農牧場経営のひとつに、岩木山ろくの常盤野地区に開かれた「農牧社」があった。農牧場経営には多くの津軽士族が携わっていたが、社長は後の第五十九

開拓集落となった。また、ふもとの宮地地区は岩木村長の三上重造などが中心となり、国有林の払い下げによる開拓が行われた。昭和30年代の高度経済成長期は、岩木バイロットファームが岩木山ろく百沢地区に設置された。それは、国の農業政策の一環である、大型農業機械を導入した酪農経営であった。

岩木山ろくの人々はこの悲しみを忘れぬよう犠牲者の冥福を祈り、のちに土石流に流された住居付近に「示現堂」を建立する。岩木山の観光開発が本格化するのには昭和30年代末以降で、百沢地区にスキー場、津軽カントリークラブ（バイロットファーム跡地）、嶽地区には岩木スカイライ

## 岩木山ろく開発の変遷

宮本利行

（県史編さん調査研究員）

五戸高等学校教諭

銀行初代頭取となる大道寺繁禎、副社長は後の青森市長となる笹森儀助が就任していた。

ると、観光開発がさかんになり、岩木山ろくも観光リゾート開発地として注目される。その開発に拍車をかけたのが、皮肉にも岩木町の住民にとって決して忘れることのできない災害であった。その災害は、昭和50年

こうして岩木山ろくは長い間農牧地として開発されていくが、経済成長により国民全体の所得水準が上がると、観光開発がさかんになり、岩木山ろくも観光リゾート開発地として注目される。その開発に拍車をかけたのが、皮肉にも岩木町の住民にとって決して忘れることのできない災害であった。その災害は、昭和50年

第2次世界大戦の敗戦後、満州や樺太などからの引揚者や復員軍人、さらに戦災者らが増大したため食糧の増産が急務となり、耕地開拓は国家的事業となった。岩木山ろくでは、上弥生、羽黒、瑞穂、小森山、杉山、平和などの地区が開拓され、

8月6日、百沢地区の蔵助沢で発生した土石流災害である。この災害により、22名の命が失われ、岩木町に悲しみの歴史を刻むのであ

る。岩木町の人々はこの悲しみを忘れぬよう犠牲者の冥福を祈り、のちに土石流に流された住居付近に「示現堂」を建立する。岩木山の観光開発が本格化するのには昭和30年代末以降で、百沢地区にスキー場、津軽カントリークラブ（バイロットファーム跡地）、嶽地区には岩木スカイライ



岩木実験農場

（昭和30年代後半・弘前市岩木総合支所所蔵）